

特別研修終了届兼報告書

学院長 殿

所 属 文学部日本語日本文学科
職 位 准教授
報告者 宋 晗

私は、2024 年度大学教員特別研修員として学外研究に就いておりましたが、以下のとおり終了いたしました。
つきましては、「フェリス女学院大学教員特別研修制度に関する規程」（2000 年 5 月 22 日制定）第 11 条第 2 項の規定に基づき、研修成果に関する報告書を提出いたします。

1. 研修テーマ・研修先等

研修テーマ	六朝詩の表現史的研究
研修先 (国・都市・研究機関等)	日本（本学 研究室）
研修先指導者 (不在の場合は記入不要)	
研修先及び指導者 選定理由	

2. 研修日程

日程	渡航先・滞在地	研究機関名	備考
4 月 1 日 ～ 3 月 31 日		フェリス女学院大学	
月 日 ～ 月 日			
月 日 ～ 月 日			
月 日 ～ 月 日			

3. 研修報告

(1) 実施概要：研修内容（具体的に記載）

研修者はこれまで、六朝時代（222—589）の文学の展開について研究を進めてきた。例えば、この時代に編纂された名文集『文選』は、『枕草子』に「文は文選（立派な文章と言え文選）」と称賛されている。すなわち六朝文学は、古代中国の書記言語と制度を導入した古代日本において（そして朝鮮半島とベトナムにおいても）文化のモデルとなるものであった。六朝文学を研究することで、古代東アジアの文化史を考える上で有効な視座を獲得できるのである。

研修期間中は、第一に、六朝中期を代表する文筆家・鮑照（414—466）の漢詩の自然描写について考察を深め、特に、鮑照詩が持つ画期性を、空間の雄大さを巧みに描写した点に着眼して調査・分析を行った。また、中国古典文学の専門家である東京大学教授・齋藤希史氏、京都大学名誉教授・川合康三氏にご教示を乞い、研究の更なる精緻化に務めた。

第二に、2024年12月に、古代文学会よりシンポジウム登壇の依頼があったため、同会よりいただいたテーマ「立ち上がる〈実態〉をいかに捉えるか」に基づき、古代日本の文学者・山上憶良（660—733）の漢文について研究を進めた。憶良は、晩年の病苦と死に対する恐怖を「沈痾自哀文」という漢文で表現しているが、さらに、憶良自身による長大な注釈文が追加されている。本文＋自注という体裁が作者の内面を表現するのに有効な手段であったことを、六朝文学との関わりから考察した。

第三に、東京大学デジタルヒューマニティーズセンターのリエゾンプロジェクト「吉村栄吉の時代と人々」に学外研究協力者として参加した。企業家・吉村栄吉（現マリノフ株式会社・初代社長）の祖父であり、江戸時代の儒者・吉村迂斎の漢詩文集の注釈作業を担当することとなった。

(2) 研修成果及び今後の進展の見込み

鮑照の漢詩の自然描写に関する研究は、考察を進める過程で、空間の広がりを実無限のイメージとして描いた表現が、漢詩を代表する李白・杜甫ら盛唐詩人の表現方法の先蹤になっている可能性が想定されるに至った。従来の研究で評価されている以上に、鮑照の表現史的意義は大きいものであったと考えられる。以上の知見に基づく論文を執筆し、日本中国学会の学会誌『日本中国学会報』に投稿した。同会論文審査委員会より、修正の上、掲載の通知をいただいた。

古代文学会シンポジウムの報告については、山上憶良「沈痾自哀文」と六朝文学を代表する謝靈運「山居賦」の表現構造の類似性に視点を据えた内容を構想した。その成果は、2025年7月に予定されているシンポジウムで発表し、2026年刊行の同学会誌『古代文学』に論文化したものを掲載する見込みである。

東京大学デジタルヒューマニティーズセンターのリエゾンプロジェクトについては、数年にわたる共同研究のため、2024年度は他のプロジェクトメンバーと共に注釈作業に取り組んだ。最終的な成果物の公開は未定。

4. 研修成果物

研修成果物(著書・学術論文・研究発表・演奏会等(予定も含む))の発表時期等
i (査読論文)「鮑照の旅の詩における空間の無限性」『日本中国学会報』第 77 集、2025 年 10 月刊行予定
ii (訳注)『吉村迂斎詩文集』 刊行年月未定
iii (研究報告・査読論文)「自注の機能：山上憶良晩年の自己表現をめぐって」2025 年度古代文学会シンポジウム・セミナー、2025 年 7 月 13 日開催予定／『古代文学』65 号、2026 年刊行予定